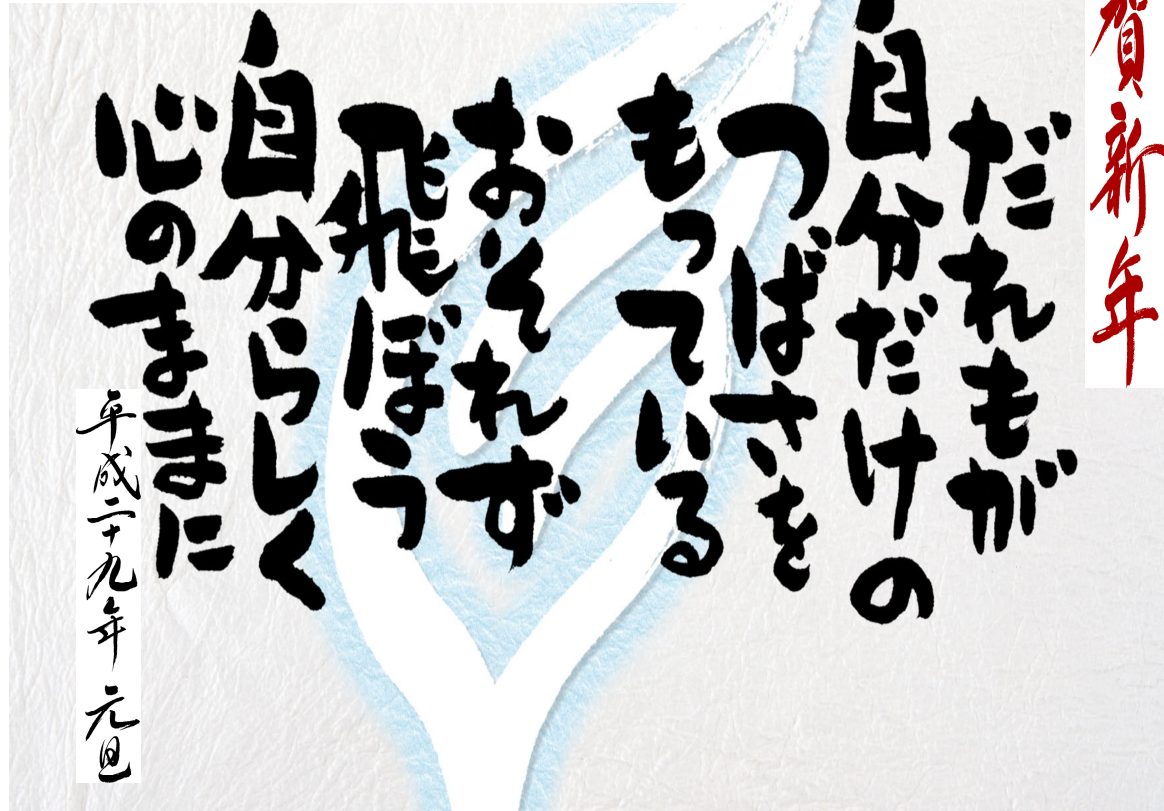


赤い羽。青い羽。モノトーンの羽。カラフルな羽。  
 大きな翼。小さな翼。高く飛ぶ。速く飛ぶ。のんびり飛ぶ。自分だけの羽。自分なりの羽。自分としての飛び方。誰かと比較する必要のない、自分らしさ、自分であることを大切に。



謹賀新年

わさみす

正月号

発行所 普門山 林泉寺  
 三戸町斗内字 寺牛 25  
 〇一七九  
 二五二八五〇  
 啓誠

お正月には今年一年の幸せを願い、多くの人々が神社やお寺へ初詣に訪れます。中にはお賽銭をたくさん入れて、何とかこれで願い事を叶えてくださいと神さまや仏さまにお願いする人もいるのではないのでしょうか。  
 生きていくことは自分の思い通りにならないからこそ、私たちが願わずにはいられないのかもしれない。私教には「誓願」という言葉があります。この言葉は、仏さまが全ての生きとし生けるものを全て救うまでは自分は救われることはない、という願いと誓いを表した言葉です。  
 私たちは日々生きる中で突然の予想もしない出来事に自分自身の根底から揺り動かされてしまうことがあります。  
 そのような時にでも強く生きていけるような支えは、限りある人生を送る私たちが、限らない「いのち」に気づき、その「いのち」を生きていこうと願い、誓うことで得られるのです。  
 お正月は私たちの「いのち」が生まれ変わる大切な時です。過去も未来も背負いながら、新たな自分を生きていこうという力強い誓願を持って生きたいものです。

誓願を持って生きる

ケツクワイイ年  
 「ワトリがケッコウと鳴きました！  
 ケッコウ(結構)いい年に  
 なりそうな予感がします。  
 新年明けましておめでとございます。  
 誓願を持って生きる

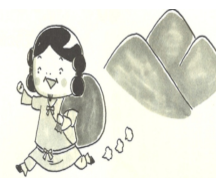
曹洞宗 普門山 林泉寺住職 飯原啓誠 合掌



おもてなしの

こころ

〇お正月の行事



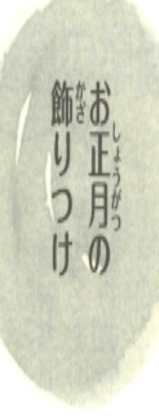
「正」という字には「年の初め」という意味があります。ですから、「正月」とは一年の最初の月、一月の別名であり、また歳神様をお迎える行事のことを言います。  
 日本人はもともと自然万物のあらゆるものに神を見いだしてきました。狩猟採集生活をしてきた日本人は米の伝来にともなつて農耕生活へと変わっていききました。農耕生活は天候不順や自然災害など人間の力が及ばない自然現象に大きく左右されるので、自然の営みに神を見いだし崇めるようになったのです。昔の人は亡くなった人の魂は山や田の神となり、年の初めに、その年の作物が豊かに実り、家族みんなに幸せをもたらすために訪れると考えました。歳神様は正月の間はそれぞれの家に滞在することから、その前に大掃除をしたり門松を飾ったりして歳神様をお迎えする準備をします。この歳神様をお迎える行事が「正月」なのです。

お正月とは？

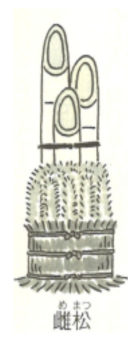
※ 昔の人が大切にしてきた慣習の一例です。地域によって異なります。



玄関口や家の神棚などに飾られる「しめ飾り」門松と同じように歳神様をお迎えるためのものです。元々は自分の家が歳神様をお迎えるのにふさわしい神聖な場所であることを示すために家の中にしめ縄を張ったのが始まりと言われています。お正月の間、家の入り口に飾ります。しめ飾りは、しめ縄に裏白、譲葉、橙などをあしらってつくりまします。裏白は常緑の葉であることから長寿を、譲葉は新しい葉が出てきて、初めて古い葉が落ちることから譲つて絶やさぬ」という願いが込められています。橙は家が代々栄えるとして縁起物として正月飾りに使われます。しめ飾りを簡略化した輪飾りは、火の神の入り口である台所、水の神の入り口である水道などに飾ります。



鏡餅は歳神様への備え物であり、穀物の実りをもたらす歳神様の依りつくところとされています。鏡には神の姿がとどまるといふ信仰から丸い餅を鏡にみたてて飾ります。(昔の鏡は丸だけだった) 大小二つ重ね合わせるのには、月と日を表しており、福德が重なって縁起が良いと考えられたからです。大小二つ重ねられた鏡餅は、半紙を敷いた三方と呼ばれる台にのせ橙、譲葉、裏白、昆布を添えています。  
 橙、譲葉、裏白はしめ飾りと同じ理由で飾り、昆布は子孫繁栄の願いが込められています。





# 三戸もかしがたり

相撲が盛んだった  
斗内地区の力自慢  
**南部の角力**  
**蛇石八太夫**  
のお話です。



前回からの続きです。この武士のすすめ、八太夫は南部の殿様にお目見えしました。殿「八太夫、その石灯籠をもちあげられるか。その灯籠をこっちへ持ってきてよ。」八太夫「ハイ。」八太夫は軽々と石灯籠を殿様の方へ持って行きました。殿様もこの八太夫の大力には感心したりびびったりして、早速お抱え力士にしたりして、早速お抱え力士にしました。やがて、殿様のお供をして江戸へ出ました。殿様は、方々の集まりなどで八太夫の力を自慢しましたので、江戸でもいつのまにか評判になりました。

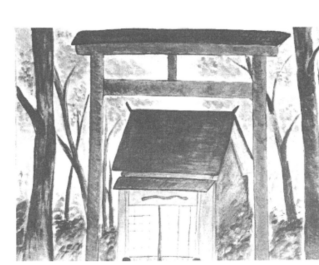


ので江戸中でも評判で、備前の殿様には自慢の種でした。今年も、その大会が開かれる事になりました。八太夫も殿様のいっつけで出場する事になりました。殿「八太夫、お勝てよ、あの備前殿の日の自慢の鼻をへし折ってくれよう。」

八「はい、必ずや勝つてこらんにいれます。」いよいよその当日になりました。怪力もこの頃では江戸中で評判になりました。備前の力持ちと、南部の力持ちの一番が見ものだということで、会場もみるみるうちに見物の人々でいっぱいになりました。一番：二番と取り組みがすすんで、予想通り備前と南部の力持ちの優勝争いになりました。呼び出 西：備前山 東：南部山 二人の力士が土俵でしきりをはじめると、ざわざわしていた場内もいつのまにかシーンと静まりかえって、この勝負はどうなることかと見守ります。ほ「つけよい」の声と共に立ち、がちゃんと身体をぶっつけた二人の力士は、がぶりと四つに組みました。からだは滝のような汗が流れています。行司の「ほ「つけよい」の声に、一人の力士は再び激しくもみ合いをはじめました。のこった、のこった：のこった。えいこ



という気合いが場内にひびくと「しん」地ひびき、砂けむりの中で「さあ」と軍配は八太夫にありました。日本一という評判の備前の力士が、土俵の砂に埋まっています。「わあっわあ」という場内の見物の人々の声で、しばらくざわめきがとまりませんでした。その中で、くやしそうに八太夫をにらんでいる備前の殿様の顔、これもまた見ものでした。やがてさわぎも少し静まった頃、備前の殿様は 南部の相撲！そちの今の手は相撲にはない手だぞ。何というか。とくやしそうに怒鳴りました。



悠然と土俵に立っていた八太夫は、平気な顔で「これは南部相撲の手斧割という手でございます。」と答えました。その後、八太夫は後輩を熱心に指導しましたので、南部の相撲は盛んになりました。今でも、三戸地方では相撲が盛んで、大関 鏡岩や第四十二代名横綱 鏡里はこの三戸から出ています。野月には白龍神社があります。この神社は鏡里が相撲とりになったとき、お母さん

が立派な相撲取りになるようにと水ごりをとってお願した所で、横綱になった鏡里は神さまへの御礼と村人への感謝の心をこめて、古くなつたお堂を立派に建てなおしたということなんです。どつとはれえ

※ 本堂の廊下に、鏡里の写真を飾っているのですが、それに加えて鏡里の実家の奥山光義家より毎年相撲のカレンダーをいただいているので掛けています。

それと、私の小・中学校の同級生の峰崎親方（現役の頃の四股名 三杉磯、東洋）から毎場所番付表が送られてくるのでそれも掲示してあります。ごらんください。

## 「11ぴきのねこ」のはずが...

今更と思うかもしれませんが、三戸町出身の漫画家・絵本作家 馬場のぼるさんの代表的な作品は、みなさんご存じの、「11ぴきのねこ」です。

が、しかし、町内には「4ひきしかいない」のを知っていますか。何処にいるか知っていますか。石で出来たオブジェのことです。私だけが知らないのだからか。恥ずかしい話なのですが、ここに来る前、名前は聞いたことがあるという程度で、三戸町出身だとか、三戸町、商工会議所、郵便局等々がこんなにアピールしているとは思っていませんでした。そこで、何処に？、11ぴきいるのだからということを探しはじめました。まずはみなさんよく通るのでいつも見ていると思いますがアップルドーム前。後は何処だろう？。



関根ふれあい公園



関根橋の公園



アップルドーム前



役場前



※ このように4ひきしかいないねこは、絵本ではなすが、思い浮かべなから、改めて巡りがてら、見つけてしょうか。

## 「こんな、おいしいジャムを見つけました。」

あるスーパーで珍しいジャムを見つけました。いろんなジャムがあるけど、三戸地方名産のカシスで作ったジャムです。パンに塗ったり、ヨーグルトに混ぜて食べています。これはなんと！。檀家さんの、干草場の中平周治さんが作っているそうです。

檀家さんも色々な物をつくっているんですね。我が家の自慢とか、商品があれば、この紙面で紹介したいと思しますので、どうぞご応募下さい。



## 平成29年 新春ご祈禱会



元旦午前零時 法要開始

2017.01.01